

もくぞうぼさつがたりゆうぞう ざぞう 木造菩薩形立像および座像

市指定有形文化財（彫刻）

宮内地区の熊野大社考古館に、宝冠ほうかんをつけた菩薩形ぼさつぎょう（釈迦が出家する前の、宝冠と装身具をつけた姿）の弥陀座像みだざぞうと2体の薬師・観音、計3体の仏像が安置されています。

武田好吉氏たけだこうきち（郷土史家）の資料によると、写真中央の弥陀如来座像みだによらいざぞうは高さ56.5cmで、膝や両手の部分はなく、宝冠や服装、唇に墨や朱色の塗料が残っています。丸顔で耳が長く、表情は伏し目です。

写真右の薬師像は、高さが69cmで、両手の部分はありません。頭部は非常に簡略化されていて、眉、眼、鼻、口、耳は墨で描かれています。一方で、背面や服装は彫刻されていて、両足は親指だけ彫られています。体の表面には鉋彫りなたぼ（丸ノミでしま模様を刻む技法）が施されています。

写真左の観音像は、高さ62.8cmで両手はありません。頭部と顔のつくりは薬師像と同じですが、足の彫り出しは見られません。体の表面には、鉋彫りが不規則に施されています。木材は3体ともカツラ材を使用しています。

仏像の彫られた年代は、平安時代中・後期と言われています。鉋彫り等の技法が平安時代中・後期から鎌倉時代に東国でよく見られたためです。

仏像の来歴については諸説あり、一説には熊野大社が平城天皇へいぜいの勅命によって大同元だいたう（806）年に創建されてから50年余年後に、天台宗の僧である慈覚大師じかくだいし・円仁えんにんが作ったと言われています。円仁が熊野大社に参詣した際に、大破していた建物を復興し、祭礼のきまりなどを定めたほかに、自ら弥陀・薬師・観音の3体の仏像を彫ったと言われています。しかし、熊野大社の本堂・末社まつしやが焼失したという記録もあることから、この3体の仏像は、もともと一連のものとして作られたのではなく、火災や災害の後、古い仏像を集めて供えられたという説もあります。



この3体の素朴なつくりの仏像からは、当時の人々の純粹は祈りが感じられるような気がします。

南陽市文化財保護審議委員 前田みゆき
平成29年7月1日号 市報なんよう掲載